
浮気

華泥棒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浮気

【Nコード】

N0459B

【作者名】

華泥棒

【あらすじ】

他の女とキスしちゃいけないのか？お前以外の女に『好きだ』とも『愛してる』とも言ったことねえのに？つきあってるわけでもねえのに？全部遊びなのに？それでもこれは浮気なのか？

「亮のバカ！！もう知らない！！！！」

アイツのその言葉が頭の中でずっとずっと 1日中こだましてた。

俺 坂下 亮は今日彼女とケンカした。

ケンカ理由は 俺の浮気。

浮気はこれまで何度かしたことがあったが ああやって怒鳴られたのも 頬をたたかれたのも初めてだった。

アイツはたいした力ないから たたかれてもそれほど痛くはなかったけど・・・

静まり返った俺『達』の部屋

鳴らないインターホンと携帯

人の気配のない空間

・・・気持ち悪い

吐き気までしてきた。

「・・・ケホッ」

咳き込む。

ああ　そういえば俺が咳すれば　それだけで風邪薬だとか買ってきてたなアイツ・・・

心配性なんだよ。

浮気だつて・・・心配すぎだ。

遊びだよ　あれぐらい。

ただ　酔った相手が『キスしてよ』とか言い出すからしただけで・・・

好きなのは　愛してるのは

お前だけだつてわかんねえのか？

「・・・んなの　言わなくてもわかると思ってたんだけどなあ・・・」

言わなきゃわかんねえこともあるってことか。

キスは言われたらする。

罪悪感なんてなかった。

だけど

アイツ以外の女にくっせー甘い台詞を言ったことはなかった。

『好きだ』『愛してる』

そんなの アイツ以外に言ったことはない。

キス以上のことだって アイツにしかしたことねえぞ？

意思表示をしてはいるつもりだった。

「………そういや アイツに俺から電話したことなかったな」

いつも 電話はアイツから。

メールはたまに俺からするけど……

あ……だめだ んなの考えたら声聞きたくなってきちまった……

目をつむって椅子に座ると今朝のことを思い出す。

『……遅かったね 朝帰り？』

『あー・・・バイト先の女につかまった。』

『・・・え？』

『バイトが終わって帰ろうとしたら客の女が飲みに誘ってきたんだよ』

『・・・何したの？』

『何って？キスだけ』

『だけってなに・・・？』

『酔ったいきおいで向こうが誘ってきたからしただけだよ』

『・・・』

『何？』

『なんで私以外の人とキスするの？私のこと好きなんじゃないの？』

『好きだよ？お前のこと。愛してる　世界で1番愛してる』

『だったらなんで？なんで私以外の人と・・・』

『なんでお前以外としちゃいけないの？』

『なんでって・・・』

『たかがキスぐらいで怒んなよ お前にいくらでもしてやってるだろ?』

『キス・・・ぐらい?』

『キスぐらい だろ別に。キスぐらい誰にでもできるぞ俺は。あ、人間の女ならの話だけだな!アハハッ』

『亮のバカ!!知らない!!!!!!』

バシンッ!!!!!!

長い長い巻き戻しと再生が終わる。

そういえばアイツ 泣いてたっけ・・・

そういえばアイツ どこ行っただ?

そういえばアイツ 今風邪ひいてんだっけ?俺のがうつったってたな・・・

そういえばアイツ 財布持ってたねえな

そういえばアイツ 携帯は持ってるな

『そういえばアイツ』が続く。

アイツのこと以外考えられない

携帯が鳴る。

「・・・誰だ？」

ピッ

電話に出ると聞き覚えのある女の声。

『もしもし亮く？今ねく一人なのく家行っていー？』

「別にいいけど？」

『じゃあ今から行くねえくくく』

ピンポーン

ドアを開けると見覚えのある顔。

名前なんて覚えてねえ。

「ごめんね急にいく会いたくなっちゃったのく」

「あつそ」

部屋はやかましくなった

インターホンと携帯は鳴った。

人の気配もある

なのに 吐き気がおさまらない

アイツじゃなきゃだめだ

「ねえ亮・・・キスしてえ？」

「・・・・・・・・・・」

女の肩を握って顔を近づける

・・・だめだ

気持ち悪い

「・・・無理」

「ええ！？なんでええ！？」

「・・・・・・・・気持ち悪い」

「はぁ！？何それえ！最低！亮のバカア！……！」

『亮のバカ』

同じ言葉なのに 違う

女は泣きながら部屋を出て行った。

アイツも泣いてた あ的女も泣いてた

なのに 違う

全然違う

「・・・・・・・・・・・・・梓」

1人の時 初めて名前をつぶやいてみた

声が聞きたい

顔が見たい

抱きしめたい

キスしたい

梓・・・

カチャ・・・

気づいたら携帯を握ってた。

プルルル・・・プルルル・・・

「・・・もしもし？」

「・・・・・・梓？」

「亮・・・」

「・・・梓 愛してる」

「え？亮？」

「梓 帰ってきてくんない？」

「やだよ・・・だって亮 私以外でもいいんでしょ!？」

「・・・無理 お前じゃないと・・・なんもできねえ」

「・・・」

「梓・・・会いたい」

それだけ言つと 意識が遠のいた。

「・・・う　亮・・・亮・・・」

「・・・ん」

目が覚めるとそこはベッドの上で　横を見ると心配そうな梓の顔があった。

「・・・梓」

すぐに梓に抱きつく。

「だめ！寝てなきゃ！」

「・・・なんで」

「バカ・・・熱あがって倒れたんだよ？もう・・・」

ああ　吐き気はそのせいかな？

・・・いや　やっぱそれだけじゃないかも。

「・・・梓　愛してる」

「・・・バカ　病人が何言ってるのよ」

「・・・悪かったよ　もうしねえ。お前以外の女とキスしねえよ・・・」

「当たり前でしょ！？常識よぉ！」

「・・・梓 こっち来いよ」

梓の腕をつかむと梓はため息をついた。

「・・・しょうがないなあもう 私がいないとだめなんだね？」

「・・・ああ 俺はお前がいないと狂っちまうよ」

「バカ・・・んっ」

冷たい梓とキスをして あたたかい布団の中で 君と抱きしめあった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0459b/>

浮気

2010年10月20日03時33分発行